

○9月23日（火）

当日は、台風接近のため、空港閉鎖が決定し、やむなく香港に宿泊することになった。しかし、香港は初めてであり、話に聞くより立体感あふれた町で、中国に返還後も変わらず繁栄しており、2010年には500メートルのビルが建設されると聞いたのは驚きで、これは地震の心配をする必要がない地域であるからだろうと思った。禿山にビルが林立しており、壮観であった。日本と都市の形態が全く異なっており、一見あり。

○9月24日（水）

香港を午前9時出発しアムステルダムへ（長い飛行機の旅であった）。私は2回目だったが、その風景はハウステンボスと酷似した町並みで目を和ませた。予定が遅れ、ライデン市訪問はキャンセルとなった。その後、ミデルブルフ市へバスで移動し、当初は明朝の訪問の予定であったが、夜でもオーケーということで、急きょ、午後7時30分に訪問したにもかかわらず寛大な歓迎を受けた。ミデルブルフ市庁舎は数世紀前の古い建物で今も利用されており、印象的だった。石造り建物というのは、年代を超えて活用できて趣があり、大変すばらしかった。

歓迎レセプションでは、ショエナール市長の心のこもったあいさつがあり、歓迎は30年の友好の重さを感じた。

歓迎レセプション終了後、ホテルへ。

○9月25日（木）

早朝よりミデルブルフ市役所訪問。市庁舎の前では朝市が立ち、4トントラック50～60台分の乳製品・葡萄・林檎・カラーピーマンなどが陳列されており、週に3回ほど実施されるそうで、牧歌的で行政と市民が垣根のない様子うかがえた。



ミデルブルフさるく

午後0時から、デッカー京子さんの案内で1時間半ほどの市内視察を行った。特に印象的だったのは、古代の町並みの中で道幅を広く取っており、また、道路側溝も特別につくるのではなく道路の真ん中や端を流れるもので、まさにお金のかからない町づくりが16世紀に造られており、地下倉がどの家庭にもあり、町そのものは全く近代の建物が混入しておらず、古代そのものの印象を受けた。

一方、長崎市民の版画展も開催されていたが、一部にでも原爆展をあわせて掲載されていると、さらに両市の交流が深まるのではないかと感じた。

その後、ブルージュへ移動し、オランダの景勝地といわれるブリュージュ市内を2時間ほど視察した。古代都市の中に、こつ然と川や大木の森林が維持されているということは、今日の日本、長崎ではとうてい考えられず、これは子どもの教育、高齢者の癒しの場として過ごすには最高の環境であり、お国柄とはいえ何かしら我が市にも、と感慨深い思いがした。

ルーアン市へ約5時間をかけてバスでの移動。車窓は広大なオランダ・フランスの北歐酪農草原で牧歌的な光景が永遠と続き、日本と違い山一つない。低地であり、そういう中で水との戦い。10年前とすれば、今や近代的な風車が各所に林立し農業と風力が融合して営まれていた。

しかし、農業の生産性を考えるとどれくらいの生産性が望まれているのか、大いに興味があり、時間があればこの分野も勉強してみたいと思った。物価は日本より1割から2割高く感じた。また、水の大切さも痛感した。飲料水はどこでもお金で求めねばならず、日本は水に関しては恵まれていると思わざるを得ない。

○9月26日(金)

早朝よりバスでカーン市へ移動し、長崎外海・ヴォスロール姉妹都市委員会と合流した。

ヴォスロール村の村長も同行された中で、歓迎セレモニーが行われ、デュロン市長のあいさつを受けたあと、カーン記念館を視察した。

フランスに至っては、ノルマンディーから始まって今日を迎えたとの趣旨が伝えられる。長崎の平和祈念館の5倍ぐらいの施設で、第二次世界大戦から今日までの流れが克明に展示・記録されており、フランスの発展の現実がよく分かった。長崎においても、原爆だけでなく、第二次世界大戦から原爆投下までの記録を原爆とあわせて展示すると、もっとより深く原爆に対しての理解が得られるのではないかと感じた。

午後0時15分から、参加者約100名によるヴォスロール村姉妹都市記念式典が執り行われた。ヴォスロール村は人口約350名の小さな村で、住宅はあちらこちらへと点在しており、声をかけても届かないほどである。記念式典は従前からの庁舎で行われたが、村長をはじめ村の関係者多数の出迎えがあり、外海町との交流の深さを感じた。外海町の人々はホームステイをしていると聞き、それは両市の友情をますます深めるもので、本当の姉妹都市の真髄であると確信した。

昼食会では、歌やプレゼント交換等で盛り上がった。長崎でいえば、あぐりの丘周辺で行われたというような状況であった。

姉妹都市記念式典終了後、バイユー市へ移動し、バイユー市役所表敬を行った。長い行程の中で、若者の行動が見受けられず、中央との格差があるのか、老人の姿ばかりが目

ついた。議会関係者も、町並み同様、高齢者が多かった。また、商業にも活気が感じられなかった。

○9月27日(土)

モンサンミッシェル視察後、バスにて(5時間)空港へ。ここでも山はなく、のどかな風景が永遠に続いていた。その後、リスボンへ、3時間の飛行機の旅。ホテル着が午後10時となった。

○9月28日(日)

午前中は、リスボン市内の視察を行った。世界遺産の「ベレンの塔」及び「ジェロニモ修道院」の2か所を視察したが、世界遺産とはやはり「すごい」の一言。

午後は、在ポルトガル大使館公使主催歓迎昼食会において皆さんとの懇談を行ったが、その中で、神山公使は「日本国情が一番気になる」と言っておられた。

○9月29日(月)

午前中、ソアーレス・ドス・レイス国立美術館(30分立ったまま鑑賞)及びクリスタル宮庭園に植樹された被爆柿の木を視察し、ポルト市庁舎で行われた「ポルト市主催歓迎レセプション」に出席。ポルト市主催30周年事業DVD鑑賞。どの都市も何世紀も以前の古い建物が今も現役として活躍しているのは文化の違いであろうと感じた。市側の関係者の方々は、非常に友好的で親切で感銘を受けた。

現地人と結婚しておられるサントス優子さんや、高原さんが日本・長崎を紹介し、友好を深めておられた。

町の道路は、傾斜が13度から15度ぐらいで小型自動車が石畳を走り、町そのものは古代であるが、実生活も過去のものと感じない。また、坂道を古い電車が走っている。これは長崎においても戸町、滑石、東長崎、茂木方面へも可能ではないかと思わせた。一番驚いたのは、家の一軒一軒に老人が立ち、「タバコ頂戴」と日本の戦後を思い出させるようだった。福祉はどうなっているのかと・・・危惧する。市の財政状況、政策なども勉強できればよかったのではないかと思った。

産業はワインがメインで、道中もワイン畑のみが目に入り、ワインの町の印象を受ける。

○9月30日(火)

ポルト市からパリへ移動し、ユネスコ本部表敬訪問を行った。まず、長崎の被爆天使像を視察。村井アジア太平洋州課長の案内説明。キャリア暦20年の活躍には感銘を受けた。

松浦事務局長より、世界遺産登録に対する心構え、措置方法などの話があり、1時間ほど対話を行った。その中で、地球環境というものを道義的に考える必要があり、日本では次の2009年から10年にかけては、小笠原諸島や奈良の古都が有望であり、長崎のキリスト教会は12年ぐらいという状況にあるとのこと。軍艦島においては、ユネスコで取り上げられているが、登録となると少し先の話となるだろうとのことであった。これには環境整備が必要であると感じた。

今回、姉妹都市提携30周年記念公式訪問団の一員として感じたことは、まず、日程がハ

ードスケジュールで、とにかく時間にゆとりが欲しかった。もちろん、数多くの都市を視察となれば、やむを得ない状況であったと考えられるが、せっかくの機会、その都市の行政内部も勉強する必要があったのではないかと思った。

また、生活水準は変わらないのかも知れないが、物価が高く感じた。ユーロが強い、EU全体は上であるのだろうが、一般生活は日本の方が暮らしやすいと思ひ、それは何であるのか。

我が国以上にある意味で高齢化が進んでいると感じた。

古き良き物も維持し続ける、心の豊かさがうかがえる都市づくりが実施されているようだ。日本のような索漠さがなく、パリの中心街を歩いただけで、人の表情・雰囲気から心の豊かさが感じられた。それはお国柄なのか、行政なのか、それとも・・・・・・？

「百聞は一見に如かず」。自分たちの生活と比べて町・人・心の豊かさも十分に伝わり、長崎の風土、まちづくりに取り入れ、活かす方法もあろうかと。歴史とは、長い年月が必要である。目先じゃないよ、お金じゃないよ、見る・感じる、とても大切なことであると改めてつくづく思い知らされました。

終わりに、今回の視察に際しまして、皆様のご協力に感謝申し上げます。ありがとうございました。